

【活動報告】

多摩大学と帝塚山大学との合同ゼミ及び飛鳥寺視察について

2013年10月28日から29日にかけて、本学インターゼミ・アジアダイナミズム班は、帝塚山大学と合同ゼミを実施したほか、飛鳥寺にてフィールドワークも行ったので、以下概要を報告する。

1. 合同ゼミについて

2013年10月28日、帝塚山大学にて多摩大学のインターゼミ・アジアダイナミズム班（経営情報学部の金美德教授・巴特尔准教授と学生6名）は、帝塚山大学（人文学部日本文化学科の鷺森浩幸教授・清水昭博准教授と学生4名）と合同ゼミ「東アジアのなかの飛鳥寺」を開催した。

下記合同ゼミのタイムテーブルに示した通り、両学の教員による合同ゼミの趣旨説明、参加学生による自己紹介を行った後、多摩大学からは「日本とユーラシアの交流—飛鳥寺を手掛かりに—」と題し、本年春からの研究成果を報告した。帝塚山大学からは「吉川真司『飛鳥の都』について」と題し、鷺森浩幸教授を中心に、自主的な学習会の形で、吉川真司著『飛鳥の都』の最初の部分を読み進めてきた成果報告が行われた。

最後に、鷺森浩幸教授には歴史学の立場から、清水昭博准教授には考古学の立場から「飛鳥寺について」と題し、飛鳥寺に関わる問題を論じて頂いた。

今回の合同ゼミは、両大学の初の試みでもあり、限られた時間のなかで行われたものであったが、参加者全員が積極的な議論を交わし、新たな知見や知識を得ることができた。今後は、引き続きより幅広い分野で同様の合同ゼミを実施して行きたい。

多摩大学・帝塚山大学合同ゼミタイムテーブル

14：00	開会（参加者の自己紹介、両学教員による合同ゼミの趣旨説明）
14：15～14：45	報告1：「日本とユーラシアの交流—飛鳥寺を手掛かりに—」 報告者：多摩大学インターゼミ・アジアダイナミズム班メンバー（多部田裕也・経営情報学部3年、市村江梨果・経営情報学部3年、勝山義弘・経営情報学部2年、杉山友哉・経営情報学部2年、王星星・天津财经大学交換留学生、宮崎真・多摩大学OB 現上智大学大学院修士課程2年）
14：50～15：20	報告2：「吉川真司『飛鳥の都』について」 報告者：帝塚山大学学生（三好直樹・大学院修士課程2年 上野真奈・大学院修士課程1年、西連寺匠・人文学部3年、魚谷なつみ・人文学部2年）
15：30～16：00	レクチャー1：「飛鳥寺について—歴史編」 報告者：鷺森浩幸教授（帝塚山大学人文学部日本文化学科、ご専門は

	古代史)
16:00～16:30	レクチャー2:「飛鳥寺について一考古編」 報告者:清水昭博准教授(手塚山大学人文学部日本文化学科、ご専門は考古学)
16:30～17:00	閉会(総括)

鷲森浩幸教授のレクチャー



帝塚山大学の皆さん



清水昭博准教授のレクチャー



本学インターゼミ・アジア班の皆さん



合同ゼミ参加者

2. 飛鳥寺視察について

2013年10月29日、本学のインターゼミ・アジアダイナミズム班は、フィールドワーク調査の一環として、飛鳥寺を始め、飛鳥資料館、元興寺、奈良国立博物館正倉院展、東大寺など歴史、文化施設を見学した。アジアダイナミズム班は、本年春より「日本とユーラシアの交流—飛鳥寺を手掛かりに—」を研究テーマとして掲げ、文献調査を中心に取り組んできたが、今回の帝塚山大学との



合同ゼミに加え、飛鳥村まで足を運んで実地調査（現存する歴史的遺跡、資料など）を行った結果、主に次のような成果を得ることができた。①本年春より取り組んできた研究の内容と方向性が間違っていないことを確認できたこと、②今回得た新たな知見や知識は研究論文の完成に大きな弾みになったことである。

飛鳥大仏



飛鳥寺の石碑



元興寺にて



飛鳥寺略縁起



元興寺



東大寺石碑



参加者の感想

以下は、今回の合同ゼミと飛鳥寺視察に参加した本学学生による感想文である。

① 杉山友哉（多摩大学経営情報学部 2年）

今回のフィールドワーク（帝塚山大学との合同ゼミ、飛鳥寺・博物館等の見学）は、今まで点と点であった知識が線で結ばれた。また、今までとは異なった視点の歴史観を知ることによって、思考の幅を増やすことができたであろう。新しい気づき、発見、知識の確認ができたので、フィールドワークは成功したと思う。今後、内容を深掘りしなければならないところや、新しく調べなければならないことも分かってきた。研究論文の完成までの時間は残り少ないが、今回学んだことや疑問点、発見を論文に反映させて行きたい。

② 多部田裕也（多摩大学経営情報学部 3年）

初日の合同ゼミは、大変有意義な情報交換ができた。特に飛鳥寺の歴史については、我々が調査し形作ってきた認識をひっくり返されるような情報も提示された。今まで進めてきた論文の内容を修正、もしくは書き足さなくてはいけないということに気付かされた。一方、2日目の飛鳥寺でのフィールド調査では、実際現地を訪れたことによって日本はユーラシアから多くのことを学んだということを改めて感じさせられた。東アジアもっと言えばユーラシア大陸に目を凝らせば、日本がいかにユーラシアの風の影響を受けてきたかが分かる。ユーラシア大陸で興った文化や情報は、シルクロードを通して大陸中に広がる。その情報が行き着く最後の場所、ユーラシアの掃き溜めが日本である。現在の日本人の中には、ユーラシアの掃き溜めとしてユーラシアの多様な文化が混交した血が流れている。この日本には誰一人として「俺は純粋な日本人だ」と言える存在はいないのであろう。このことを胸に留めて謙虚に生きていきたいと思う。

③ 市村江梨果（多摩大学経営情報学部 3年）

今回、飛鳥寺に行ってみて、飛鳥寺がある奈良県明日香村の環境について気づいたことがあった。私は今年の夏に韓国へインターンシップで行ったため、その時に百済であった地域である現在の扶余に行こうとしたが、悪天候の関係で実際に行くことは出来なかったが、扶余の資料や写真から見た扶余の環境がとても明日香村と似ていることに気づいた。飛鳥寺が建てられた環境と扶余の環境が似ていることは、明日香村だからこそ百済からの渡来人は百済と同じような寺院である飛鳥寺を建てたのではないかと思った。

これ以外にも学んだことはたくさんあった。特に思ったことは、本などの文献資料からだけで学んだことには限界もあり、フィールドワークを行うことで資料とはまた違った新しい発見が出来ることである。現地を実際に見てみることの重要さをとても強く感じたので、今回のフィールドワークで学んだことを今後の研究に活かしていきたい。

④ 勝山義弘（多摩大学経営情報学部 2年）

アジアダイナミズム班は4月から文献調査を始め調べてきた。奈良を訪れるのは今回が初めてであった。文献で得た情報は確実ではないこと、いまだわかっていないものである、

と清水先生から教わった。地形からは、斑鳩という地域がある。明日香村より北にあり、飛鳥と難波を結ぶ川船は必ず通る場所になっている。当時は飛鳥都の防波堤のような役割をしていた。瓦についても多くのことに触れられていた。文献だけでは限界があったが、資料をもらい説明を受けることで得るものがたくさんあった。

帝塚山大学の学生の皆さんは歴史と地形から飛鳥寺を調べていた。アジアダイナミズム班は歴史から飛鳥寺を調べるという切り口はなかった。遣隋使は600年をはじめとし、4～6回派遣されたと言われている。だが、日本書紀にはこの記述はない。623年から留学生・留学僧が20人弱帰ってきたとされている。倭国の方向性を決める大事な役目であった。

⑤ 王星星（中国・天津财经大学交換留学生）

奈良市と西安市はかつて日中両国の首都として深い絆で結ばれていた。この歴史的な良縁によって、1974年（昭和49年）に奈良市と陝西省西安市は友好姉妹都市関係を結んだ。1979年（昭和54年）、私の祖父は訪日団の一員として、西安市農業友好視察団は奈良などの町へ視察した。子供の頃、祖父の写真集が大好きだったので、奈良の歴史と文化を調べた。今回、東海道新幹線に乗って山々を通り抜けて見た自然の風景は、私の故郷にとっても似ていて、異国にいるという感じは全くしなかった。京都で乗り換えた在来線の車窓からは唐の時代の建築様式にとっても似た東寺の五重塔が見えてきた時は、私は実家へ帰る列車の中にいるような錯覚に陥ってしまい、夢の中のような一時だった。

日本、中国、朝鮮、東アジアの歴史根源は長く、お互いどこかで似ている要素は沢山ある。奈良は、日本の古都として、文明の源流がここで生まれ育った。文明が誕生するところは異文化交流がずっと存在すると言われている。遙か昔、現在の日中韓、さらにはアジア地域は如何に交流を図ってきたか。同時に、我々は、その時代から何を学ぶべきか、いろいろと考えさせられた貴重な体験になった。

⑥ 宮崎 真（多摩大学OB、現上智大学大学院修士課程2年）

帝塚山大学との合同ゼミで、飛鳥寺を事例として東アジアとの交流の意義を確認できて何よりだった。帝塚山大学の鷺森浩幸先生による、飛鳥寺の成り立ちや位置付けについての解説は、我々が熟知していなかったことはもとより、類義ではあるけれども、異なる言葉が使われているなどして、とても参考になった。また、同大学の清水昭博先生の寺院に関する考古学的な説明は、鷺森先生による説明にも当てはまることだが、我々が翌日行った飛鳥寺や元興寺での見学において、貴重なレンズとなり、見学がより一層実り多いものになった。帝塚山大学の学生による発表も、我々と注視する点が異なっているので、我々があまり探求していなかった部分が探求されていて、参考になったというだけでなく、同じことについて研究している彼らとの交流は、非常に刺激になった。今後とも、置かれている環境が異なる方々との交流を重ねていきたいとあらためて強く思った。最後になるが、帝塚山大学の皆様、今回の合同ゼミにおいていろいろとご協力いただいたことを感謝の意を表したい。また、いつか皆様にお会いできる日を楽しみにしている。

以上